

## 教育課程編成委員会 第1回議事録（全体会）

日 時：2019年8月20日(火) 18時30分～20時00分

場 所：東京YMCA医療福祉専門学校15教室

出席者：長嶋 昌樹氏      三沢 幸史氏      望月 太敦氏      小檜山 修平氏

村上 剛氏      中浦 俊一郎氏      倉持 有希子氏

列席者：品川 智則氏      中村 由美氏      林 恵子氏

### I. 聖書日課 YMC Aデイリーメッセージ

村上氏より本日の聖書の一節とその解説が朗読された。

### II. 議事

#### 1. 委員会の進め方の説明

村上氏より本委員会の進め方について、資料「委員会規定」と「委員会実施の手引き」を基に説明が行われた。

#### 2. 委員自己紹介

今年度より東京都介護福祉士会会長の長嶋昌樹氏が新たに委員として加わる事となった。三沢氏、望月氏、小檜山氏は昨年引き続きお引き受けいただいた。

出席委員及び列席者が自己紹介と近況報告を行った。

#### 3. 委員長（議長）選出

長嶋氏が全員一致で議長に決定した。

#### 4. 部会ごとの話し合い

介護福祉科の部会：長嶋氏、望月氏、倉持氏、品川氏、村上氏

作業療法学科の部会：三沢氏、小檜山氏、中浦氏、中村氏、林氏

部会に分かれ、50分間、介護福祉科と作業療法学科それぞれで話し合いを行った。

各学科長から、昨年の本委員会で頂いたご意見・ご提案を受けて、どのようにカリキュラムに反映させていったのかなどの説明と今年度の工夫や力をいれている部分の説明を行い、その後、各委員から意見、質問をいただきながら話し合いを進めていった。

#### 5. 部会報告

※それぞれの部会の詳細な内容は別紙各部会記録に記載。

<介護福祉科> 倉持学科長

前回の本委員会で出されたご意見を受け、ボランティアに関する取り組みや国家試験

策対策について報告をした。「地域つながり隊」は昨年より工夫を加え、地域に理解してもらえる学校を目指しながら、感じる力が弱い学生達が多い中ルールを上手く敷いて、関わられるようにしていきたいと考えている。

また新しい委員も加わったので学習マップを示しながら介護福祉科の学科の目標等も共有した。現在の課題としては、①本科生はもっと学校に帰属意識をもってもらうこと、放課後の学習習慣をつけること、②訓練生はコミュニケーション力を補うためのボランティア活動参加などの工夫が必要であること、③留学生は日本語力アップのための策が必要なこと等の説明をした。委員からは、地域つながり隊の取り組みは学生達に地域を意識してもらうのにとても良い方法である、外国人留学生達の日本語力アップには同じ国同士が固まってしまわない工夫が必要、養成課程の中で障害福祉について学ばせて欲しい等の意見が出された。

#### <作業療法学科> 中浦学科長

カリキュラムマップに各学年終了時の共通目標（アウトカム）を加えたこととディプロマポリシーの説明をし、この方向性で進むことの賛同を委員から得た。

国家試験対策については、1年生から国家試験を意識させる取り組みを始めたこと、教員達の意識改革が必要であることが教員間で確認されたこと、そして具体的な取り組みについて説明を行った。国家試験勉強の道筋、枠組を作ったことで中間レベル以上の学生達を合格にもっていくことができそうな手ごたえがある。課題は最下位グループの学生をどのように引き上げていくかである。

委員からは学生同士が教え合うことで、支え合うことの大切さや同時に学力も上がると良いというご意見や、実習を通して対象者に少しでも自分が役に立ったという経験がモチベーションにつながるだろうから実習に期待したい、といった意見をいただいた。

臨床参加型実習については、従来型の実習よりも作成する記録を調整して学生の負担を減らす目的だったが、結果は前よりも記録が多くなって大変だという声もあがったため検討が必要である。

#### 次回の委員会日程

2019年10月9日（水）18時30分～20時00分

記録 林 恵子

## 2019年度 第1回教育課程編成委員会・部会（介護福祉科部会）記録

出席者：永嶋 昌樹氏 望月 太敦氏 倉持 有希子氏 品川 智則氏 村上 剛氏

進行：倉持 有希子氏

記録：品川 智則氏

### 1. 倉持学科長から

#### 1) 前回までの報告と取り組んでいる内容の報告

前回までの内容についての確認とボランティアに関する課題への取り組みや国試対策に関する内容について報告がなされた。永島委員長に対しての本校の取り組みについての説明（ブランドスローガン、カレッジスピリット、介護福祉科の学科の目標）が行われた。本校が具体的にどのような学生を育てようとしているのか、教育目標に関する内容や2年間の学習マップが示された。学習マップは、様々な内容が学習できるように、どのようなプロセスで学ぶのか、科目間連携が見てわかるように作成されている。また、人間関係のコミュニケーションの科目内容を、山中湖集中授業として行っていること等が報告された。

#### 2) 現在の課題

2年生25名、1年生40名となっている。1年生の内訳は、留学生15名、訓練生9名、本科生16名となっており、3つのカテゴリーの学生がークラスのなかで学んでいる。この3つのカテゴリーが学ぶ状況は本校としては初めてである。この状況は、良い面もあるが、難しい部分も出てきている。留学生を増やすことも大切にしているが、日本人の入学者が減少している。この傾向は最近続いている。今年度から、3時限目までの時間割に変更した。目的は、訓練生が入学しやすいようにするためである。4時限目は主に留学生が補講の授業として使用しているが、実施してみても見えてきた課題もあり、本科生は、3時限目で授業が終わるとすぐに帰ってしまい、アルバイトが中心となってしまっている学生もいる。学校に帰属意識をもってもらえるように学校内で役割を担ったり、放課後学校内で勉強する習慣やきっかけづくりをしていく必要がある。また、訓練生も、コミュニケーションが苦手な学生も多く、地域に出て、ボランティア活動などを通して、力をつける必要がある。

留学生の課題としては、授業の意味が理解できても試験問題にすると解けない、語彙が足りない、といったものが挙げられる。言葉のニュアンスや一つの言葉や、さまざまな意味をもつ言葉の理解が難しい。もっと日本語の先生に関わってもらいたい必要があるのではないかと考えている。N3を取得していない学生おり、留学生の中でも日本語力も差がある。施設でのアルバイトもある。アルバイトに力を入れ過ぎると、勉強は続かないなどの問題がある。

#### 3) 地域つながり隊について

YMCAの団体の特性を生かしたボランティアを、組織的に実施できるのではと前委員長から指摘があった。それに対して、つながり隊を組織化し、地域のボランティア活動に参加するようにしている。具体的には、国立市社協との連携、ひらや照らす（認知症カフェ、難病の会）とのつながりを実施している。これらを通して、地域にYMCAを知ってもらいきっかけ、「専門職が行う介護」について知ってもらい機会などにしていきたい。今年度も、夏まつりに多くの地域の方々

が参加された。市長や議員等の参加もあった。今後もこのような活動を通して福祉の学校ができる役割を考え、地域とつながっていく土台をつくっていきたいと考えている。また人と関わることに課題がある学生にも、他者とつながり協力して仕事をしていくことや、一人の人ときちんと信頼関係を築いていく力を地域の中の活動で育てていきたいと考えている。留学生も、アルバイトが忙しいと思うが、自分たちが働いている施設とは別の環境に身を置いて、いつもとは違う気づきなどにつなげていきたいと考えている。

留学生をどのように育てていくべきかは大きな課題である。

## 2. 意見交換・感想など

望月委員：地域のことを学生の中に学ぶことは大事なことである。この取り組みが広がっていけばよい。

望月委員：今後の地域つながり隊をどのように広げていくか？（他の学生に広がっていくために）取り組んでいることは何かあるか。

倉持学科長：メンバーは選抜と言っても課題がある学生も多く含まれている。つながり隊を通して個々の課題に対して力をつけていることを目的で選抜している。広げ方としては、全員がつねにボランティアに参加するわけではなく、数名が参加し、報告し、共有するということを繰り返し深めていくようにしている。他のクラスメイトも参加することができるようにつなげづくりをしていきたい。

望月委員：障害福祉を学ぶ機会はあるのか。障害福祉を学ぶためのカリキュラムの工夫はどうか。

倉持学科長：現在のカリキュラム構成のなかでは障害福祉を伝えるための時間は正直少ない。そのような中で、利用者の暮らしを理解するというテーマの授業などで障害福祉を学ぶ機会を設けるようにしている。例えば国立市在住の当事者の方に授業に参加してもらいご自身のことを話して頂いたり、その話を聴いて、グループディスカッションをして学ぶ機会を設けている。今年度は、介護福祉科だけでなく、作業療法学科と合同の授業を実施することを予定している。また、この当事者の方が行う、講演会に学生を参加させるような取り組みをしていきたいと思っている。他にも、難病をお持ちの方に来校して頂いて授業を行っている。ただ病気の理解だけでなく、実際にどのようなことに困っているのかなど多くのことを語ってもらっている。

望月委員：現場では、呼吸管理が必要な利用者をどのように受け入れているか、地域でどのように支えていくかという課題に直面している。地域の力と介護福祉士が中心となって支えていくことが求められるので、地域について学ぶとともに、障害福祉に関する学びは養成課程の中でしっかりと学んできて欲しい。

永嶋委員長：地域つながり隊にとっても関心をもった。二十歳前後の学生に対して、地域に関心をもってもらうにはどうしたら良いのか、難しい課題の一つだと思う。しかし、実際に地域に入っていくことで興味をもつこともできる。私の授業内でも、地域の住民の人たちが集まり、地域の課題を話し合う場に学生を連れて行った。地域の人たちが、学生に意見を聞く場面が多くあった。地域の人たちからは、学生に入ってもらって非常に新鮮だったとの感想があった。活動し直につながることで得られることが多い。

学生全員を組織化するのは難しいかもしれないが、活動が全体に広がっていき、自主的にやってみ

たいと思える学生が増えていくことが大切であると思う。このような機会があること自体が大切である

永島委員長：ベトナム人同士が一緒にいることが多いのか？

倉持学科長：決してそうではない。日本人との交流が日本語力の向上につながると感じている学生、その必要性を理解している学生は日本人ともかかわる機会をもっている。また、ベトナム人とフィリピン人の学生同士で出かけたりすることもあるようで、共有言語の日本語をしようしているようである。

永島委員長：母国が同じ人が多いとその中で固まりができてしまう可能性がある。むしろ同じ国の人が少ない方が良かったりする場合がある。技能実習生で失踪してしまう人の中には、日本人とのコミュニケーションがうまくとれないことが原因のひとつになっている。うまくいっている施設は様々な国の人を採用している。同じ国の人同士でまとめないで日本人と関わる機会があると良いのではないか。

倉持学科長：学校にいるときは、日本語を使わないようにしようということをルール化しているが、仕組みとして日本語に触れる機会を多く設けていくことが大切であると感じている。ベトナム人のなかには、日本人と意図的に関わる学生もいる。そのような学生はボランティア活動の場に自ら参加している学生もいる。

永島委員長：留学生は施設でバイトしている学生が多いのか？留学生は、施設から奨学金を受けている関係なのか？

倉持学科長：留学生は、施設でアルバイトをしている。施設が保証人となって、留学生をサポートしている。奨学金の保証人にもなっている。ただ、施設のアルバイトの時間や求められる内容も施設によって違い、勉強を優先的に実施できる施設もあれば、休みが少なく忙しい時間を過ごしている留学生もいる。

永島委員長：日本語検定は読む力があればよいが、本当の日本語の力は聞いて理解し、自分の考え意見を自分からはなそうとすることが大切である。そのような機会がないと日本語力は伸びないだろう。

倉持学科長：来年度はN2相当の学生をいれるようにする。留学生に力を注いでしまう分、本科生に力を注ぎきれしていない。

倉持学科長：高校ガイダンスでは、介護の魅力を伝えるようにしている。潜在的に、人に役に立ちたいと思っている高校生は多い。その思いを表現する仕事として介護福祉士を選択できるような話を伝えていきたい。

望月委員：小学校のときから介護の魅力を伝えていかないといけない。小学校中学校高校で介護の魅力を感じる機会があることで初めて将来の仕事として介護福祉の仕事を選択してもらえらる。

以上

## 2019年度 第1回教育課程編成委員会・部会（作業療法学科部会）記録

出席者：三沢 幸史氏 小檜山 修平氏 中浦 俊一郎氏 中村 由美氏 林 恵子氏  
進行：中浦 俊一郎氏  
記録：中村 由美氏

### 1. 本日の意見交換のテーマについて

中浦学科長から、前回の会議を受けての本日の意見交換のテーマについて説明がなされた。

#### 1) カリキュラムマップの変更の共有

作業療法士としてスタート時の具体像を明確にした。別紙資料を参考に、それぞれの学年の終了時の目標像の共有、ディプロマポリシーの共有、を行う。

##### 【意見等】

委員：良いと思う。

#### 2) 国家試験合格率の低迷について

国試対策を早期から開始している。これまでのようにやっていたのでは間に合わない。後ろ向きになってしまう学生が多い。個人の問題と環境の問題の両方からアプローチが必要である。

対策として、1年生から国試を意識し、自分がやらなければいけないということを繰り返し、理解させていく。3科目模試へ向けて目標設定する。覚える⇒アウトプットの繰り返し。2年生も目標は3科目模試にしている。前期から1日1問学習、1週間に一度確認テストを実施。自分たちでやらなければ、という雰囲気づくりをしている。学習委員（リーダー）をたて、教員含めリーダー会議を開き運営。3年生は前期から、明確な目標を持つようにする。学習は教科書を基本に。夏休みにも宿題。

##### 【意見等】

小檜山委員：後ろ向きの学生に対して作業療法士の良さを分かってもらえるとモチベーションアップにつながり良いのではないか。

小檜山委員：グループの中での協力し合う姿はどうか。

中浦学科長：グループごとの特性あり。異性間の協力難しい。学年の特性もある。

小檜山委員：励まし合いはOTにとっても必要なスキルである。

中浦学科長：学生の頑張りに水を差すようなこともあるかもしれない。

小檜山委員：自分が学生の頃は、皆で頑張ろうという雰囲気があり、自分自身も励みになっていた。

中浦学科長：このクラスには独特な雰囲気がある。

中村氏：グループ編成は能力別でうまくいっているが、この学年に関しては皆で助け合う、引っ張って行くという雰囲気が今より必要である。

中浦学科長：方法論は間違っていないと思うので継続していきたい。

三沢委員：臨床実習後の変化を期待したい。対象者の役に立っているということが分かればよい。

中浦学科長：成績が伸び悩んでいる学生に対しては、難しい部分があるが、臨床を通してモチベー

ションアップにつなげていければと考えている。

小檜山委員：理解度が高い学生が他の学生に教えるということ（学習のピラミッド）を利用することはあるか。

中村氏：理解度が高い学生間での教え合いの姿がある。それを広げるのが課題。

中浦学科長：学年をまたいで教え合うということもある。

中村氏：前期から1年生は放課後学習の習慣がついてきている。自然発生的に2年生が1年生を教えに行く姿も見られている。

中浦学科長：国試対策については全体を巻き込んでやっていくという方向性。枠組みを組んで中間層を引き上げるという効果はある。理解度が低い学生へのアプローチが課題である。

### 3) 臨床参加型実習について

1人の症例だけでなく、多くの症例に関われるようになる。課題については、デイリーノート、見学報告書、週間サマリーをレポートの代わりに用意。最終的には発表レジュメだけあればよい。

実際にはレポートに近いものを作らなければならず課題が増えた、などの声がある。

臨床実習前の実技試験を行い、フィードバックをしている。

#### 【意見等】

三沢委員：レジュメの量は？

中浦学科長：A4で2枚。

三沢委員：評価実習は逆に難しい。

中浦学科長：やはり難しさある。教員間でもどのような方向にもっていくか考えている。

三沢委員：4年制を基本としているので難しさはある。

中浦学科長：MTDLPを使ってやっていくということも。まだ教員の中でも浸透していない部分がある。

三沢委員：MTDLPはツールとして良い。

中浦学科長：MTDLPも視野に入れつつ、3年制の中でどうしていくか。理想だけではできない部分もある。また、進捗状況を伝えたい。

以上